



現代社会における青年期の問題（II）：余暇

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003907

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

— 余 暇 —

野 村 哲 也

〔Ⅰ〕 余暇論の系譜と現代社会における余暇の意味

〔Ⅱ〕 大衆余暇状況における青年

〔Ⅰ〕 余暇論の系譜と現代社会における余暇の意味

今さら思想史をひもとくまでもなく古代ギリシャにおいては、余暇は人間生活の中心にすえられていた。「あらゆる行為の中心原理は閑暇であり、他のすべてはそのまわりに跪座するものである。それは仕事の目的ですらあり、我々は閑暇を得る為に働いている。」（アリストテレス）とすら考えられたのである。^①

クライブ・ベルによれば、この事は更に次のように敷えんされてる。すなわち経済的保証と余暇と自由の結合のみが純粹にかつ真正に物を考えかつ感ずるに必要な度量(と知性)、ゆったりした感覚を与えるのであって、人は自分と何らかの利害や特殊な関係のある物事に対しては完全に open minds であることは出来ない。^② その意味において労働は、その実利性という点から見精神を獣化させるものであり、真理や美を追求する者にとっては避くべきものとされ、この苦痛に満ちた賤業はすべて奴隷にやらせたのである。古代ギリシャの文化はこの意味で奴隷の労働の上に成立したものとって過言ではないだろう。しかしベルはあえてこの余暇に積極的意味すなわち文化の母としての位置を与えた。こうしたギリシャ的余暇が、すべての人にとって労働が必要活動となっている現代にそのまま通用するとは考えられない。しかし人間にとって余暇のもつ意味の一つの側面を鋭くついているといえよう。古代ギリシャにおいて、余暇を意味する schole が school の語源であるということが、それを象徴的に

示している。そのみでなく、トマス・アクイスは、学芸そのものについても自由学芸(artes liberales)と奴隷的学芸(artes serviles)の区別をしている。前者はそれ自身の中に意義を有する人間活動であり、後者は何らかの実益という直接的目的を有するものである^③。これを現代の教育思想に即して言えば、前者はR.M.ハッチンス等のリベラルアーツを重視する教育であり、後者は職業的専門教育という事になる^④。教育が青年期を論ずる時欠く事の出来ない要因であることを考えれば、こうした余暇—学芸論は本稿にとって分析の重要な関連枠となろう。更に又、この liberal arts を遊びの教育と解するならばこれは重要な意味をもつ。現代日本における余暇活動の混乱、すなわち主体性創造性の欠如やブーム現象は、実は明治以来の教育がよき働き手となるための教育であって、遊びの教育がなされなかったという所にあると考えられるからである。

余暇に積極的な意義を認めるこの余暇観は、その後の歴史的過程の中で種々の屈折を受けるが、その中でまず、余暇をネガティブなものとする立場に、プロテスタンティズムがある。原始キリスト教においては、労働は原罪に対する罰と考えられ、天国から追放された人間の当然受くべき苦役とみられていたが、更にプロテスタンティズムにおいては労働は宗教的な過程とされた。すなわち宗教的確信に基くきびしいたゆまざる労働こそが罪をやわらげ善と敬けんの生活に導くものとされた。その意味で職業は「天職」すなわち神の呼びかけでありそれを怠ることは召命(Berufen)に応じぬ罪悪であった。マックス・ウェーバーがいう如く、それが内面的自発性や、世俗的禁欲主義として資本主義発展の精神的背景となったことはよく知られている所である。^⑤

この観点からすれば、余暇は再び労働のために奉仕されねばならない、すなわち余暇は文字通り re-creation であり労働力の再生産のためのものという以上の意義は持ち得ない。それどころか、庶民にとってこの贖罪的天職的労働観は、むしろ余暇を怠惰ないしは快樂追求的なものとして遠ざける方向に作用し、特にそれが支配者の統治ないしは富の蓄積の手段として用いられた場合、被支配者に対する余暇や奢嗜の罪悪観のおしつけとなって現われる。

それと同時に一方では、特権階級の余暇形態の歪みが生ずる。ヴェブレンに

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

よれば十九世紀有閑階級の生活における関心の焦点は、げん示的余暇と誇示的消費であつたが^⑥、そこには古代ギリシャ的な創造的余暇の姿は全くない。そこにあるのは階級性の誇示と確認である。我が国でも徳川中期以後の町人文化特に遊里的文化には、町人の経済力の上昇に従いそれを余暇消費の面で誇示するという傾向が多分に認められるのである。この余暇活動におけるげん示性や誇示性は少し形を変えて現代社会においても見られる。ミルズによれば、それは新中間層に多く見られる上層階級との一時的身分の同一視という形でのげん示である。すなわち、職業の世界では果し得ぬ上層階級への移動を余暇消費の領域での一時的な奢侈によって夢見ようというのである。そしてそれが現代の余暇形態を余暇条件（ヒマとカネ）の未成熟にもかかわらず、実質以上のものに見せかけようとする歪みと空虚さをもたらしているように思われる。

これに対して労働を人間的に有意義な活動とみる立場ではどうであつたろうか。労働を通じて人間は創造者になるというルネッサンスの労働観はその一つであるが、そこでは端的にいて現代の職人気質に代表されるような労働が考えられていた。職人の場合、遊びにおける自己表出ないしは自己形成と労働における価値の産出とが結合されている。それは一種のディレッタンティズム（道楽主義）であり、C.グリーンバーグはこの道楽の精神を、産業主義的社会における労働と余暇、ないしは労働と文化の問題を解決する方法の一つとすら考へている^⑦。所でこのような労働は、今日でも比較的人々の理想の労働の姿として考へられている。たとえば（やや次元は異なるが）高校生に対する職業選択に関する調査では、自分の趣味や興味を生かせる職業を求める者は75%と圧倒的に多い^⑧、現に職業についている人に対する別な調査では、仕事は楽しみだから特に余暇などはいらぬという者も12%いる^⑨。しかしここで問題となるのは、こうした労働観に合致するような職業は特殊な専門的職業や芸術家等いわば少数のエリートを除いて現代社会ではほとんど望み得なくなっているということ、あるいは又、未開社会やかつての農民の農耕儀礼等に見られたような労働と遊びが未分化かつ融合した形の生活もほとんど姿を消しているということである。

同じく人間の精髓は労働であるとし労働を通じての人間の全面的発達をうた

うマルクスの場合、余暇はいかにとらえられていたであろうか。マルクスはその資本論第三章第七節において、「必要の領域の彼岸において、自己目的として行なわれる人間の力の発展が、真の自由の発展が始まる。」と述べている。すなわち人間が生きていくための自然的必要としての労働から解放された自由な時間として位置づけられており、又「個人の完全な発展のための時間」ともいっている。もちろんマルキシズムにおいては、例の土曜労働の中にレーニンが無償の労働の姿を見出したように、「必要の領域の彼岸」＝余暇＝遊びとは考えられていない。そこには必要活動としての労働をこえた社会主義的労働というものも考えられているから必ずしも資本主義社会における余暇とは同一に考へられていないといえよう。しかしやはり自然的必要を超えて「人間的欲求」を充足しその「人間的可能性」を実現させるための主体的な選択の自由をもった時間であることには変りない。

ところでマルクスはこのように意味づけられた余暇も、資本主義社会のように、労働が生産物との関係においても、又労働行為そのものにおいても疎外されているところではその本質がゆがめられていると考へる。労働は生活の資を得るためにやむを得ず従わなければならない苦役と化しており、余暇はせいぜい労働再生産のための休息か、緊張回復のための娯楽の時間でしかあり得ないと考えられる。C.W.ミルズの言葉をかりれば、労働における疎外とは生活の資を得るために人間の生活における最も活動的な時間を犠牲にし、人間に潜在している創造的能力に表現の機会を与えず無駄にしてしまうことを意味する。すなわち、労働を超えた領域での価値をこそ追求すべき人間が、そのための手段であるはずの労働において真剣にならざるを得ないことにあるのである。^⑩

しかし最近のように労働過重よりは余暇が、貧困よりは豊富が新たな問題として提起されつつある状況では、この観点のみではそのままあてはまらない。もちろん我が国を含めた多くの国において、未だ労働過重と貧困が解決されているわけではなく、依然として大きな問題であることは無視出来ない。しかし少なくともかつての女工哀史やでっち奉公とって過重な労働と低賃金は姿を消しつつある。そしてそれに代る新たな人間疎外要因、すなわち機械化、合理化、巨大組織化による労働の非人間性、職場と家庭の分離、都市化に伴う人間

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

関係の非人格性（インパーソナル化）が余暇に新しい意味を求めつつある。ところでこの新しい疎外は、実は人類が現代の高度な物質文化と引きかえに背負ったものであった。そして好むと好まざるにかかわらずこの方向はもはや逆にひきもどすことは出来ないだろう。とすれば現代人にとって可能なことはこの現実の上に立って、労働時間を出来るだけ短縮し、余暇における人間性の回復と発現をはかるということにならざるを得ないだろう。最近の労働運動がより高い賃金の獲得と共に、労働時間の短縮を中心的課題としてあげていることは、こうした状況を示すものと言えよう、しかしこのようにして次第に増大してくる余暇も又、種々の要因によってゆがめられたものとなってくる。

その要因としてあげられるのは、まず生活における労働の意味の変化である。先に述べた労働の疎外は、人々に労働のポジティブな面から目をそらせ「労働の価値は労働自体、もしくは労働によって生み出される価値ではなく、その労働によって楽しみ得る余暇・消費の価値によって定まる^⑩」ものとなり、労働は収入源としての意味のみが肥大した。そしてそれと対照的に余暇とは金を使う道であるといった考えが生まれて来るがそれは現代における余暇活動が単にヒマのみでなく、カネの問題でもあるといわれるような結果となつてあらわれる。のみならずこの労力＝収入源という観念は、二重、三重の意味で悪循環を生み、新たな余暇疎外の要因となる。すなわちこの観念は労働の社会的意味を問うことなく、ただカネになれば何でもよいという考えであるが、それが企業においては、その社会的責任を度外視した商業主義となる。そして余暇産業という形で人々の余暇を支配し、余暇から創造的意味を奪い去ることになるのである。

労働における緊張や束縛が強くそれからの回復が十分でない間は、安易な気ばらし的娯楽を受動的に受け取るという形もやむを得ぬであろう。しかし余暇産業は、その必要を越えて大衆にこびるかの如く、大衆の心の底にある安逸性や低俗性をくすぐる形で次々と新しい娯楽を作り出し、それを大衆に押しつけてくる。大衆はじっとしていてもお膳立てされ、セットされた娯楽が金さえあればすぐ手に入る状態で、目の前に並べられてはらんする。そして人々の余暇は単なる生理的、精神的回復の必要からのテレビやパチンコではなく、娯楽

産業に支配された余暇となり、生理的回復どころか、労働とは別の種類の刺激（スリルや興奮）によって相変らずエネルギーをすり減らされる時間となっているといっていだらう。ラザースフェルトによれば「人類が永年かかってやっと手に入れた余暇を（人々は）コロンビア大学ではなく、コロンビア放送局に捧げている」のが現状である。すなわち古代ギリシャの理念においても又マルクスの立場においても余暇に与えられた意義とは程遠いものになり、その多くは人間性の発展のためにではなく、単なる気晴しや娯楽に使われているのである。

〔Ⅱ〕 大衆余暇状況における青年

T. パーソンスによれば、^⑩青年文化は、青年が置かれている社会状況並びに、そこでの位置（situation）に対する反応の様式である。とすれば、(1)機械化、巨大組織化、都市化が著しく、労働においても、人間関係においても疎外要因が増大しつつある状況の中で、(2)一方において青年への期待のレベルが上昇すると共に、他方青年が社会的役割を果し得るようになる年令が上昇して、それに至るまでへの依存が増大しつつあり、青年は身体的エネルギーにおいては最も充実した時期にありつつ、何ら目立った社会的役割を果し得ないという位置におかれていることから、(3)もどかしさやいらだたしさを感じるのであろう。これは青年が生活に対して serious であればある程強いと思われる。しかし一方社会や人生について serious に考える事を放棄したもの、あるいは既に絶望しあきらめた青年は、その置かれた特殊な地位——それを新余暇階層と仮りに名づける——のもとで特徴的なパターンを作り出す。事実今日青年文化といわれるもの多くは、この余暇行動の中に見出されるのである。

もちろん同じ青年期でも、勤労青年と学生とでは、社会における位置は非常に差がある。しかし共に現在の生活における責任の稀薄さという点では、特殊な例外を除いて共通しているように思われる。そしてこの無責任性ないしは、差当り生活に対して serious である必要がないということは、カネやヒマ以上に余暇行動の方向性を左右すると考えられるのである。

(a) 学生の場合、親えの経済的な依存という形で、生活の serious な面に

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

ほとんど直面することはない。いわば労働を免除され学芸に身を任し得るという意味で、ギリシャ市民に似た位置におかれている。しかし学校教育の普及と大衆化は、学生の中に少数のエリートと多数の非エリート学生という分裂を生んだ。かつてのエリート養成的高等教育にあっては、学生は学問、産業、政治等の分野における指導的立場に立つことを期待され、又学生自身、社会、国家にとって枢要な役割を果そうという抱負と自負があった。そして又附随的ではあるがそれに見合った地位や報酬がほぼ約束されていた。従って学生は、学問の探求という意味にせよ、社会的責任という意味にせよ、あるいは又立身出世という意味にせよ、学業に勉め、教師の規範に同調するということに学校志向的 (school-oriented) であり得た。しかし今や青年中期にあたる年齢層ではその約77%が高校生であり、大学生も同年令層の青年の19%を占める現在 (旧制中等学校では同年令層の25%、昭和15年) 非エリート学生大衆にとって、上述のような希望や期待はほとんど持ち得ない。現在大多数の学生、生徒は、成人になるまでの何年間かを過さねばならない単なるステップないしは苦役として、学校に行っているといつて過言ではないだろう。又学生達がしばしば言うように、どうせ学校を出ても、平凡なサラリーマンになるのが関の山であるということにあって、将来について serious に考えることは無意味に近く、いきおい現在に関心の焦点を向けざるを得ないだろうし、学業よりは、余暇に目が注がれるようになるだろう。アメリカにおいては^⑧、真面目に勉強しようと思って学校へ入ってくると queer duck の役割を演じなければならなくなるという。つまり知識や勤勉を嫌い、数学や外国語等のむづかしい学科を避けて、広告術やコーラス、タイプなどの易しいものを選ぼうとするふらふら生徒と争わねばならないのである。それどころか、学校は娯楽化しつつあり、凡庸者を甘やかし、楽しませる墮落しつつあるという批判や、生徒達はひまが多すぎて訓練が不足し、ぜいたくの誘惑に負け、性的交際が過度になっているという指摘さへある。もちろんすべてがそうであるというわけではないであろうし、現在の日本がそうだというわけではない。しかし、同じような社会状況におかれ、生活全般にわたってアメリカナイズの著しい我が国にも、そのような徴候が現われつつあるとはいえるようである。J.S. コールマンが指摘するように、かつて

学科偏重の知識教育か、人間性の教育かと言われた論争は、もはや意味が薄れ、現在では、その両者を含めた学校活動 (school activities) 対生徒達の余暇への傾斜の対立が問題になりつつあるとっていいだろう。

この余暇への関心の肥大を強めるものとして、学校における仲間集団の影響の強さがある。コールマンは、学校教育の普及を青年文化出現の主要要因としてあげているが、それによれば、学校という残余の社会と隔離された中で、長い期間同じ年輩の者が集団的に行動することが、その中で青年相互の接触を密にし、強い連帯感や、同調性を生み、成人の社会とは独立した規範や地位体系を持った下位社会を作るにいたる。すなわち、青年はその社会的報酬に関して、成人の是認や制裁よりは仲間のそれに注目するのである。こうしたことが青年に特有な興味や関心を焦点化させることは容易に理解出来よう。我々が青年前期及び中期にあたる中学、高校生に対して行なった調査でも、仲間と共に居る時が最も楽しいと答える者が51%ある。又仲間から相手にされないことの方が、親や先生に相手にされないことよりずっとつらい (51%) と答えており、彼等にとっての準拠集団が仲間であることを示している¹⁶。

ところで学生の場合、直接収入がないという点からその余暇活動において、ヒマはあるが、カネがないということが大きな制約ないしは特徴になるように考えられる。アメリカではデートや仲間との遊びのために、車が非常な関心の的になっているが、中流以下¹⁷の階級では自分用のものがないため、車の使用について親との対立がよく起り、又それに代るものとして、自分のアルバイトの範囲で買えるオートバイに人気が集まっているところもあるという。日本の場合、事情はかなり異なるが、その代り親が非常に子ども中心的であって、子の要求に対するコントロールのなさから、親の収入が余り高くなくても、無理して子の要求を容れるということが多いようである。結局親は自分自身のための服飾や娯楽への支出を減らして、子の余暇、消費へ向けるということになるであろう。子が親に対してよくいう言葉に「皆が行くから」「皆が持っているから」ということがあるがこれは、子にとって仲間への同調の強さを示すと共に、親にとっては「みな、にひけめを感じさせてはかわいそうだ」という気持ちと、皆がそうならという親のしつけの主体性のなさを示すものといえよう。

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

又、遊びの金をアルバイトによって稼ぐのもかなり多い。都市高校生の場合、約半数（49%）が過去一年間にアルバイトをしたことがあると答えており、平均して約一万円の収入を得ている。そして得た金の全部を自分で自由に使った者が79%あり、自分で必要な分をとり、残りを家に渡したものの19%を加えると98%に達する¹⁸。それに親からもらう小づかい等を合わせると、必ずしもカネの面で不自由であるとは言えないであろう。大学生の場合、学校における時間の拘束が少ないこともあり、アルバイトは更に多く行なわれていると推測される。

従って、青年（勤労青年を含めて）の購買力ないしは余暇支出は、それが親から出されるものであれ、自ら稼ぎ出したものであれ、かなり大きいと考えていまいだろう。アメリカでは youth market は有力な対象であり、多くの産業にとってエイジ・グループにうまく食い込むか否かが死活の問題である¹⁹というが、日本でも次第にその傾向が強まりつつある。毎年新しく作り出される服飾の流行や、拡大される余暇施設や用具は、その大部分が若者向けのものであるし、テレビ番組もかなりの部分が若者の好みに焦点を合わせられている。なおこうした youth market に対するアピールのなされ方が常に個人にではなく集団に向けられているということは、青年の集団準拠の強さと、仲間への同調性を裏書きするものといっていまいだろう。

この集団同調性は我々の調査でも²⁰、たとえば中学生の遊びが、B校では魚つりが盛んであり、魚釣り道具を買うものが多いのに、A校ではローラースケートがはやっており、買って欲しいものの第一にそれがあげられている、といったことにあらわれている。学校を一つの大きな仲間集団とみれば、この学校による違いは、集団同調性を示すものとみていまいだろう。そのことは更に次のテレビ聴視傾向からもうかがえる。すなわち先の中学生の男子の場合、共にアクション物といわれる番組の聴視率が最も高いが、その中の代表的番組2つについての聴視率をみると、下表のような著しい対照が見られる。同質のものであっても、集団によって話題となるか否かで差が出るとみていまいだろう。又、ローラースケートの流行しているA校では、テレビのローラーゲームを見ている者22%に対し、B校ではわずか4%である。こうしたことは、マス・コミ受容

に関して、いわゆる、コミュニケーションの2段の流れるメカニズムが働いていることを示すと共に、それが個人でなく、仲間集団というグループを通して行なわれることを物語っているといえよう。

	A 校	B 校
キ ャ ハ ン タ ー	14%	23%
ザ ・ ガ ー ド マ ン	22%	12%

もちろん、これはサブグループとしての違いであって、そうした小範囲での影響力の強さは見逃すことは出来ないが、余暇行動全般についてみれば、全体としての青少年の興味の傾向には大きな違いはない。その意味でテレビ番組の好みを見てみると、青年前期にあたる中学生では、男子がスリルやアクションのある探偵物（38%）マンガ（37%）キックボクシングやプロレス等のショー的スポーツ番組（35%）が多く、次いで西部劇や時代劇、喜劇の順となっている。又女子では歌謡番組（35%）コメディ的青春物（34%）探偵物（34%）が多く、マンガ、家庭劇が次いでいる。この好みの分析についてはデータが不足しているので、くわしいことは差し控えるが、男子においては、後に述べる如く強者の礼讃と肉体的力の誇示、女子では、感傷的なものや、自分をエスコートしてくれる騎士としての男性の力強さへのあこがれといったものがうかがえるようである。

しかしそれよりも更に重要なことは、余暇、というより全生活時間におけるテレビへの傾斜の強さである。我々の同じ調査では、中学二年生の平日におけるテレビ視聴時間の平均は、約3時間であり、学習時間は1時間20分となっている。又、休日における余暇の過ごし方では、男女ともテレビが第一位（34%）であり、男子の場合、次いで友達とどこかへ遊びに行く（家の近所以外の所）（17%）となり、女子では家の中で遊ぶ（19%）である。勉強は4%に過ぎない。しかもその遊びの内容として、友だちとだけで行ったことのあるものを聞いた所、男女共約3分の2がいわゆる商業的娯楽的プールに行っており、同じく40%がスケート場へ行っている。又男子では21%がボーリングに行っており（女子は12%）、女子の14%が、グループサウンズ等の公演を聞きに行っている。又

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

女子の場合グループサウンズ公演に対して31%が、ボーリングに対して20%が、行ったことはないが行きたいと答えており、想像以上に娯楽活動が盛んであり、かつそれを望んでいることが分る。このことは先の学習時間の少なさ、及びその人生観として、(1)立身出世主義的なもの14%、(2)社会的に有用な仕事をしたいという成就主義的なもの17%に対して、(3)平凡で楽しい家庭生活をとというマイホーム主義的なものが61%に達することを考え合わせる時、大多数のものは青年前期において既に、人生に対する hopelessness から関心の焦点を余暇に移しているとみていいだろう。

高校生の場合も、ほぼ同様な傾向がみられるが、仲間集団の影響は一層強いようである。大学区制をしき学校差の大きい大阪の場合、それはいわゆる一流高校と、二、三流高校の余暇活動の顕著な差となって現われる。その調査についてのくわしいことは既に他の所で述べてあるのでここでは結論だけを述べるにとどめるが、やはりエリートへの可能性をもった一流高校と、その望みを失なった下位高校とは、余暇のみならずすべての生活態度、価値観について対照的ともいえる差がある。T. パーソンスは、青年文化に注目して、仲間集団の関心の内容について、退行的 (regressive) なものと、進歩的 (progressive) なものを区別している。前者は対異性関係に焦点を置き、外見や肉体的能力 (男性の場合) の礼讃と誇示に心をくたく者であり、後者は活動 (activities) への関心たとえば、優れたカレッジの学生の間まじめな文化的興味が発達していることをあげている。我々の調査でも、いわゆる最下位高校では、娯楽と異性への関心が異常ともいえる位強く、男女それぞれの性的魅力の表出と娯楽への耽溺が伺われるのに対して、一流高校といわれている所では、しばしばいわれる受験一本やりのイメージとは違って、仲間同志の話題の内容でも、文学、思想、社会問題への関心が調査対象校中最も強く、クラブ活動への参加率も最も高い (59%) など progressive な傾向が強い。

大学生の場合、くわしいデータがないのではっきりしたことはいえないが、学校格差は高校より一層激しいし、親の影響力は高校より少く、学校の時間的、精神的拘束も少ないため、自分の自由に出来る時間が格段に多いため、その余暇行動は、一層顕著な分化を見せるであろう。

（b） 勤労青年の場合、学生と違って職業についているという点で、その余暇はかなり違った条件のもとにある。まづ第一に、学生ほどヒマがない、ということがあげられる。勢い娯楽施設等でのコマ切れ型の余暇とならざるを得ない。最近の調査では、²⁴ハイティーンから20才前半の若者の休日の外出先の主なものは、ダンス、ピンポン、喫茶店、マージャン、パチンコとなっている。いずれも余り若者に似つかわしくない室内遊戯的なものであり、娯楽的なものである。もちろんこれには、若いエネルギーを十分出し切れるスポーツ施設や組織、ないしは文化サークル等がないことも問題であろう。又企業内のクラブを含めて、スポーツが選手主義的なものが多く、皆が気軽に楽しめるようなものでないことにも問題はあろう。しかし今は本論の主題から離れるので余り深くは立ち入らないことにする。ただここで注目すべきことは、勤労青年、特に地方から大都市に就職して来た中、高卒の青年が、職場外の生活において非常に孤独であるということである。「若い根っ子の会」はそうした孤独な青年が悩みや孤独を話し合う場として生まれて来たのであって、この点学生の余暇がその仲間集団と強い関連をもつのと大きく異なるといえよう。

しかし、何にもまして重要なことは、そうした勤労青年をおおい、その意識の根底にわだかまる虚無感、ないしは hopelessness であろう。学生の場合にもそれはあったが、現実の社会の中にある勤労青年では、一層切実なものである。そしてそれが青年の余暇志向を強め、更にその余暇を気晴しの、享乐的なものに向けていると考えられるのである。

もちろんこれは単に青年の問題だけでなく、一般の勤労者にもある。従って本質的には、非エリート大衆 (non-elite mass) の価値志向といった方がいいだろう。ただそれが青年のもつ無責任性とそのエネルギーと、知的未成熟さによってより強く現われ、青年の行動を特異なものたらしめていると考えられるのである。

非エリート大衆（青年を含めて）の場合、その仕事ないしは職業生活において、何らかの生き甲斐を求め、見出すことは非常にむづかしい。調査時期はやや古い²⁵が、たとえば昭和34年におけるデータとして次表のような結果がある。

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

	20代	30代	40代	50代以上
a 何らかの意味で遊びよりも仕事にウェイトをおく者	15.4%	25.1%	30.5%	35.9%
b 仕事は仕事、遊びは遊びと割り切って両立させようとする者	47.9	50.5	40.5	25.7
c 仕事は手段であって遊びにウェイトを置くもの	20.8	12.8	4.9	2.7

すでにこの時点ですら、20代に余暇志向が強い。現在ではこの比率は更に高まっているであろう。そしてそれと逆に、aのタイプは急速に減少する。その理由は、(1)先に述べたルネッサンス的職人氣質的な意味で、職業に意義を見出すことは、仕事の細分化、機械化が進んだ今日大衆にとって非常に困難となりつつある。(2)かつての少年達が偉人伝を読んで奮発したように、人類や社会の進歩、興隆に貢献するような優れた学者、あるいは政治家になるということも、特に優れた才能をもつエリート以外はもはや望み得ないし、(3)巨大組織化した今日では裸一貫からたたき上げて産を成すという小企業家型の成功や出世も望み得ない。

従って、中学や高校卒の勤労青年はもちろんのこと、大多数の大学卒業者にとっても学閥的色彩の強い学歴主義と年功序列の地位体系の中では、ブルーカラーか下級ホワイトカラーへの道しか開かれていないといっても過言ではないだろう。すなわち職人氣質や、社会への貢献はおろか、地位志向的職業観すら現代では実現困難となっている。仕事と余暇を割切るbのタイプはむしろそのことを先取りし、一種のあきらめと人生への消極的態度の混入した形で表明されたものとみていいだろう。このタイプは30代、40代にも多いが、そこでは、家族を養う義務や子の教育や企業への責任といった拘束が彼等を多少とも仕事へ向けさせているのであり、それさえ人並みに果せられればあとはのんきに暮したいという気持が強いのであろう。NHKの意識調査^②では仕事にやり甲斐を感じると答えた者の中でその理由の第一としてあげられたものは、家族や子どもの成長の楽しみ(29%)であった。とすれば、家族扶養の義務もなく、店のため、主人のためといった古い労働観も持たない若者にとってCのタイプが多いのは当然といえよう。まして若年労働者の不足の著しい現在、企業は若年労働

力を確保するため、賃金の面でも労働条件の面でも好条件を提供せざるを得ない。昭和43年における18～19才の勤労者の給与上昇率は、対前年比約20%で、30～49才の13%をはるかに上回っており、年次的に見れば昭和36年に20～24才の年令層の賃金は40才台の賃金の46%であったが、44年では54%になっている。これは若者が相対的に経済的余裕をもつようになったことを示すものといえよう。又週当りの労働時間は、35年の46.8時間から44年には43.8時間に、年間出勤日数は35年の290.4日から44年の280.8日とそれぞれ減少している²⁷。それでもなお青年は、少しでも賃金や労働条件のよい所があれば身軽にすぐ転職する。昭和43年における中、高卒の青年労働者（男子）の転職率は13%であって30代以上の3%をはるかにしのいでおり、中学卒の新規学卒者の場合は22%に達する。そしてその理由は、仕事が自分に合わない（つらい、面白くない）が30%、次いで労働時間が長い（18%）給料が安い（18%）となっている²⁸。生活における無責任性と労働＝収入源という意識の現われとみていいだろう。

もちろんこの余暇にウェイトを置く立場も、余暇の大衆化という点では積極的な意味をもっているし、余暇の領域において自己を表現しようという意味ならば高度に産業化された社会での新しいタイプの人間の適応の仕方であるといえよう。しかし少なくとも現在のところ、大多数の若者の余暇活動には、主体性や創造性は余り見出せないようである。

E. A. スミスは、アメリカにおける青年の余暇行動及服飾等の消費の傾向について新奇性、熱狂性、外面性、画一性が顕著であることを見出しているが、ほぼ同様のことが我が国の青年の余暇、消費についてもいえるのである。現在のところそれを的確に示す統計的データは乏しいが、日常的経験から見て流行のスタイルに対する画一的熱狂的な追随や、青年層を対象にした週刊誌、青年層の人気のあるテレビ番組等にそれがうかがえる。たとえば週刊平凡、女性セブン、平凡パンチ等そのどれをとって見ても、ヘアスタイルや服飾にかなりの頁がさかれているが、そこに描き出されているものは、ヒッピーまがいの奇をてらったものや、機能性よりも外面性を重視したものが殆んどである。又紙面に登場する人物は、歌手やテレビタレントにレーザー等いわゆる余暇の英雄がすべてとっていい位であり、その人物達の行為や人生観が、誇大な讚美とあ

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

こがれをもって描かれている。あるいは又、ネオン街やアングラの生態が、これ又あたかも正常な生活の一コマであるかの如くに描かれ、セックスやクルマについての記事が必ずといっていい程毎号男性週刊誌にくり返してのせられている。それに対して先にのべたプログレッシブな文化への関心は、たとえば最近の労音や労演の低調さが示すように、むしろ衰退気味であり、余暇全般にヘドニステイックな傾向が強まりつつあるようである。

こうした傾向を促し強めるもの、それはしばしばいわれるようにマス・コミにおける商業主義的P.R.及びそこから生まれるブーム的流行である。ブームということ自体、それは新奇なものの出現とそれへの熱狂的追随、そしてそれに伴う画一性というメカニズムをもった社会現象であり、それは若者のあり余った（労働に向けないで余暇に向けられた）エネルギーや、仲間集団ないしは同一世代への強い同調性と符号するものであって、若者の間に起こりやすい条件を備えているが、単にそれによって大衆消費と、大衆娯楽を励起するだけでなく、そのP.R.のテクニックが、理性による判断よりは、感性に訴える印象づけを重視する為、実質的内容よりは、外面的装飾に目を奪われるという傾向を生み出す。これは、週刊誌自体が読みものから見るものへ変化したという指摘や、大衆文化全体にみられる活字文化から映像文化（マンガも含めて）への移行という事実の中にも読みとれるであろう。

そうした余暇、消費の商業主義による支配と、そのためのマス・コミにおけるP.R.の結合は、余暇からギリシヤの意味を喪失させるだけでなく、労働の領域をも含めた人間の行為全般の評価基準を変えるだろう。たとえば余暇における自己表現ということも、本来自分にあるもの、自分のもっているものの表出であるはずが、自己にないもの、すなわち、虚構や仮面の誇大な表現といった風潮を強めるが、それは行為の価値基準として感性的なものや、外面性にウエイトを置く傾向を生み、やがては誇大や虚構があたり前のものとなる。それは新たな意味で、実質よりはレッテルを尊重し（そのレッテルはマス・コミによってはられる）それによって、人間を評価し、序列づけることにつながって行くであろう。

更に又、マス・コミの影響は、ラザースフェルトの言う地位附与ないしは権

威付与の機能によって、青年の余暇行為を一層非生産的かつ仮幻的なものとするだろう。

青年は自分の肉体的な力を誇示し、その自立性を示そうとして成人や既成の権威に反抗しようとする。しかし真に自立を果し得る社会的基盤を持たないが故に、やはり根底において権威服従的態度を捨て切れない。そしてマス・コミがその権威服従ないしは信仰の恰好の対象となるのである。のみならずマス・コミは、他者志向的で自己顕示欲の強い青年達によって都合のよい場を提供する。というのは、マスコミは youth market に注目しており、青年の行動はしばしば誇大にとりあげられるが、それが青年にとって、成人との対等意識を持たせ、自己顕示の欲求をも満すのである。極端な場合、マス・コミに取りあげられさわがれる事自体を目的とするマス・コミ志向とすらなる。マス・コミ側からの目で見ても、^⑧高校生のハデな自主活動もマス・コミが取り上げなくなると、目に見えて下火となる、とさえ言われているのである。とすればマス・コミが享楽主義的な余暇、消費を、あたかも現代青年の平均像のようにとりあげる事は、単にそうした虚像を与え、band-waggon effect として作用するだけでなく、更にそうした行動の先端を行くことによってマス・コミに取り上げられ知名人となろうとする者をすらし、その余暇行動は一層奇矯をねらうものとなるだろう。のみならずそれは形を変った一時的な身分上昇であるが、それは余暇を他の目的に従層させることであって、そうした余暇は相変わらず苦役としかならないし、名を知られるということもこれ又実質や内容よりは、虚名という空しさに終るだろう。

更に又、先に述べた様な青年のマス・コミへの弱さは、形を変えた権威への服従であり、それが青年に権威服従的態度を植えつけるだけでなく、マス・コミに価値準拠を置くことになり、物事の理非でなく、マス・コミが言ったからということによって判断する傾向を生むだろう。ましてマス・コミが生産の英雄よりは余暇の英雄をもてはやす傾向のある現代では、社会問題や政治、教育といった領域でテレビタレントや歌手、スポーツ選手がそれぞれの領域の専門家にまじって論議するといった茶番劇や、芸能人の社会評論や、人生論がスタンダードなものとしてまかり通り、しかもそれが青年に大きな影響を与えると

現代社会における青年期の問題（Ⅱ）

いう事すら起りかねない。

こう考えて来る時、本来個人の領域に属し、個人の自由である筈の余暇も、個人の問題として放置することは出来ない。特に青年が次の社会を担う世代であることを考える時、それは社会にとっての重要な問題でもある。

こうした状態に対処する方法として、たとえば、J. S. コールマンは、青年に対する適切な社会的報酬を用意することをあげているし、Progressive な文化との接触（邂逅）を機縁としての創造的余暇への開眼（覚醒）という実存主義教育学的なプロセスも示唆を与えるがそれについては別の機会にゆずりたい。

注① 以下古代ギリシャに関する叙述は下記の書によった。

Josef Pieper, *Musse und kult*, 1948

稲垣良典訳 余暇—文化の基礎—

② Clive Bell, *How to Make Civilization*, PP. 34~5

③ 前掲訳書 P. 28

④ R. M. Hutchins, *The Great Conversation*, 1952

田中久子訳 偉大なる会話 1956 岩波書店

⑤ Max Weber, *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, 1904, 梶山、大塚訳 プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神、岩波文庫 参照

⑥ Thorstein B. Veblen, *The Theory of Leisure Class*, 1899

小原敬士訳 有産階級の理論 岩波文庫 参照

⑦ C Greenberg, *Work and Leisure in Industrialism*, in *Mass Leisure*, 1958 edited by E, Lavrabee and R. Meyerson

⑧ 大阪府下7高校2,014名を対象に1967年に行なった調査による。拙稿「都市高校生の生活態度と価値観」教育社会学研究 第22集 参照

⑨ 岡部慶三 娯楽志向と生活様式の変化 思想 1960年5月号 P. 54

⑩ C. W. Mills, *White Collar*, 1951

杉 政孝訳 ホワイトカラー 創元新社 P. 219

⑪ C. W. Mills 前掲訳書 P. 219

⑫ Talcott Parsons, *Youth in the Context of American Society*, Daedalus, 1962, Winter, P.P. 106~115

⑬ 池田 進 教育批判の問題 京都大学教育学部紀要 第8巻 P.P. 285~7

⑭ James S. Coleman, *The Adolescent Society*, 1961 P.P. 51~52

⑮ J. S. Coleman *Ibid* P.P. 3~4

⑯ 前出の高校生に対する調査及び、大阪府下の中学生4,988名に対し1968年に行な

った調査による。

- ⑰ J. S. Coleman, Ibid P.P.128～130
- ⑱ 大阪府科学教育センター研究報告 第32号、1967年現代の子どもの理解とその指導に関する研究 P.P.64～73
- ⑲ David Gottlieb and J. Reeves, Adolescent Behavior in Urban Area, 1963 P. 6
- ⑳ 前出中学生に対する調査の補充として行なわれた大阪府下2中学463名に対するアンケートによる
- ㉑ 拙稿 都市高校生の生活態度と価値観 教育社会学研究 第22集所収 参照
- ㉒ T. Parsons, Ibid PP.116～117
- ㉓ 前出高校生に対する調査による
- ㉔ 遠藤幸男 働く人間と休暇(2) 月刊エコノミスト 1970年8月号 P.139
- ㉕ 松下圭一 大衆娯楽と今日の思想状況 思想 1960年5月号 P.35
なおオリジナルデータは東大新聞研究所が1959年に行ったものである。
- ㉖ 経済企画庁 国民生活白書 P.179
- ㉗ 労働省編 労働白書 昭和42年版 P.173 及び 国民生活白書 昭和45年版 P.25 による
- ㉘ 青少年白書 昭和44年版 P.21 及び 国民生活白書 による
- ㉙ E. A. Smith, American Youth Culture, 1962 PP 6～14
- ㉚ 読売新聞社編 500万人の孤独 —高校の現実と未来像— P50